はしがき

日本史研究は、一九七〇年代後半～八〇年代前半を境に、大きく転換した。社会経済史的研究視角は主役を降りて、社会史的な叙述物が多くなり、実体的・実証的研究では国家史の分野が多くの成果をあげた。中世史研究では提案的論考が続いたが、寺院・都市・流通の分野で具体的研究が進んだ。一九九〇～二〇〇〇年代に入ってもこの傾向は続いているが、全体史との関係に苦闘する個別的研究が増加している。

一九八八年四月、私は筑波大学に移り、大学院博士課程歴史・人類学研究科（改組後は人文社会科学研究科歴史・人類学専攻）で日本中世史のゼミを開設し、多くの院生と勉学を重ね、議論してきた。二四年間に亘るこの経験は、私の研究に大きく寄与した。このことは本当に幸福なことであり、退職にあたりゼミに参加してくれた院生に感謝したい。

一九九〇年代は若狭国などの畿内・近国荘園を取り上げ、東寺文書・東大寺文書を写真帳で読み、かつ多くの論者の荘園制論を議論した。夏には院生・学生とともに、大部荘（おおべのしょう）の現地である兵庫県小野市で地域調査を実施した（およそ一〇年間）。今回の論文集には大部荘を直接に扱った論文はないが、あの時の調査経験が参加者のその後の研究に生きている。

二〇〇〇年頃からは、南北朝～戦国期の東国史を扱った。足利持氏発給文書を蒐集し分析・考察することや、日光輪王寺文書の系統的考察、さらに『満済准后日記』の読解などと続いた。この時期には鹿沼市史編纂事業に参加したこともあって、文書調査に院生を同伴した。いわゆる文書のほかにも、寺院で記された記録・編纂物も調査した。高野山の宿坊に供養帳があることは高崎市史以来承知していたが、下野・常陸・越後・陸奥関係のも

のを調査した。院生とともに史料の初な状態から調査しながら、高野山信仰にも関心が出てきたが、具体的には東国領主と高野山との関係を考え始めた。そのなかで武士の政治支配は宗教・文化と一体であり、政治・経済に純化して論じることは、中世社会の実態にそぐわないのではないか、との思いを強くした。

本書は三部で構成されている。第一部「政治制度と実効支配」には政治権力がどのように動かされているか、政治権力を支える社会勢力との関係で政治制度が取り上げられている。関周一「武家政権と「唐船」――寺社造営料唐船から遣明船へ――」は鎌倉～室町時代の対外交易船を警固役する負担する武士や在地階層を扱い、山田雄司「初期足利政権と北野社――御師職を中心に――」は足利尊氏・直義期に確立する幕府御師職北野社松梅院を扱っている。鎌倉幕府・室町幕府が武家政権として運営されていくに、武士以外の社会層との関係に依存していることが分かる。浜口誠至「戦国期における足利将軍家元服儀礼の政治的背景」は武士の儀礼習俗との関連で室町将軍権力論を広げている。阿部能久「観音寺所蔵「那須継図次第」について」は栃木県矢板市沢の観音寺に所蔵され、現存のなかで最も古態を示す那須氏系図が初めて紹介される。井上智勝「前田家御寶塔――上野国七日市藩の藩祖顕彰と幕藩領主の「大祖廟」――」は江戸末期の上野国七日市藩における藩祖前田利孝顕彰の塔建立とその背景を、新井敦史「下野国黒羽藩主大関家における「御朱印箱」の保存措置について」は江戸時代の画期に応じて大関家の文書が整理され御朱印箱に収められ、管理・保存されてきたことの政治的意味を考察し、山澤学「新田源氏言説の構造――もう一人の猫絵の殿様・新田由良家を中心に――」は江戸末期の開国状況のなかで、新田氏の由良家では猫絵や書の頒布などで展開した新田氏言説が社会的支持に支えられたことを述べている。江戸時代の幕府・藩の政治体制とその展開が中世段階の歴史を整理・管理しながら進められていることが分かる。いわゆる中世文書もこのような江戸期の存在形態を経て現在に伝えられてきたのである。

第二部「政治権力と地域社会」は政治支配を地域社会との関連で取り上げるか、または地域社会を支える武士

や村落の存立構造関係が考察されている。苅米一志「荘園年中行事論ノート」が荘園制成立期の在地における年中行事は荘園制度とともに国衙系本寺（本社）―末寺（末社）制に編成されて存立していると述べる。山野龍太郎「鎌倉期武士社会における烏帽子親子関係」は武士（御家人）社会にて次世代が武士集団として育成されてゆくことを、民俗社会との連想のもとに述べる。佐々木倫朗「中近世転換期における地方修験の存在形態――八槻別当を事例として――」は常陸・陸奥国境地帯の八溝山における神職別当八槻家が白川氏・佐竹氏の世俗領主と接触する世界で近世的に転換してゆく過程を整理する。須賀忠芳「会津田島にみる戦国期城下町の形成と市・宗教」は数少ない戦国期史料を、田島城下に伝承された近世絵図・伝聞と関連させ、現地調査を進めて考察する。平野哲也「沼の生業の多様性と持続性――江戸時代の下野国越名沼を対象に――」は越名沼の多様な生業は小規模需要のもとに展開し、それだけに抑制された用益となり、領主の開発命令には反対する村もあったことを述べる。政治権力や都市的需要の要請を調整するなかで在地の生活世界が存続していることが、中世・近世の時期を越えて問題となっている。

第三部「民俗と宗教」は波長の長い変化として現れる生活習俗・民俗を歴史学が考察する際に考慮すべき問題点や、生活習俗に規定されながらも超越性を示す信仰の問題を扱っている。薗部寿樹「宮座儀礼の歴史民俗学的比較研究の課題――歩射儀礼を中心に――」は村落宮座儀礼の比較研究について、鎌倉～江戸期の武射事例を吟味しつつ論じる。小山聡子「親鸞の来迎観と呪術観――覚信尼における親鸞の信仰の受容を通して――」は親鸞家族の来迎観を検討して奇瑞・呪術を否定してはいなかったと述べる。佐藤喜久一郎「『神道集』の歴史民俗――「民俗的歴史」の世界――」は『神道集』のなかに在地土着化した本地垂迹のあり方を探ろうとする。門口実代「選択され、継承される生活用具の資料性――離村時における当主の対応から――」は江戸期から続く新潟県山村農家の当主が昭和期の離村時に選択・継承した生活用具に籠められた心意を考察する。いずれも歴史の深

いところに継続し、あるいは再生産される民俗・生活感情を問題にする。こうした問題と関連するが、私はこの一年間、村落・地域社会は社会的実態として存立するだけでなく、固有の生活感情をもつものとしてとらえるべきものと痛感している。

この論文集に参加してくれた人たちは皆院ゼミの参加者である。時代は中世・近世から近代に及び、地域・民俗世界との関わりを意識するものが多い。政治制度・政治支配が在地に受け入れられる際には、在地（地域）に続く習俗的世界を媒介にしていると考えられる（いわゆる「生ける法」を媒介にして）。その習俗的・民俗的世界も波長は長いが変化しつつ政治と接触している。「中世」の時期の問題は近世や近代に明瞭に姿を現すこともある（変容しつつ）。中世史研究は中世の時期をまずは対象とするが、中世の時期を越えて、問題を考察することが求められる（勿論、古代にも無関心ではいられない）。本書を『日本中世政治文化論の射程』とした理由でもある。

列島の歴史が考えられ直す時期に、わたし達はいる。初心にかえり、しっかりとした歩みをしたい。その議論に踏み出したい。

二〇一二年三月一二日

山本隆志

日本中世政治文化論の射程◆目次

はしがき　山本隆志

第一部　政治制度と実効支配

武家政権と「唐船」――寺社造営料唐船から遣明船へ――……関　周一　3
初期足利政権と北野社――御師職を中心に――……山田雄司　24
戦国期における足利将軍家元服儀礼の政治的背景……浜口誠至　41
観音寺所蔵「那須継図次第」について……阿部能久　61
前田家御寶塔――上野国七日市藩の藩祖顕彰と幕藩領主の「大祖廟」――……井上智勝　80
下野国黒羽藩主大関家における「御朱印箱」の保存措置について…新井敦史　101
新田源氏言説の構造――もう一人の猫絵の殿様・新田由良家を中心に――……山澤　学　122

第二部　政治権力と地域社会

荘園年中行事論ノート……苅米一志　145

鎌倉期武士社会における烏帽子親子関係……山野龍太郎 162
中近世転換期における地方修験の存在形態……佐々木倫朗 183
——八槻別当を事例として——
会津田島にみる戦国期城下町の形成と市・宗教……須賀忠芳 204
沼の生業の多様性と持続性——江戸時代の下野国越名沼を対象に——……平野哲也 230

第三部　民俗と宗教

宮座儀礼の歴史民俗学的比較研究の課題——歩射儀礼を中心に——……薗部寿樹 257
親鸞の来迎観と呪術観——覚信尼における親鸞の信仰の受容を通して——……小山聡子 276
『神道集』の歴史民俗——「民俗的歴史」の世界——……佐藤喜久一郎 293
選択され、継承される生活用具の資料性……門口実代 312
——離村時における当主の対応から——

あとがき　佐々木倫朗
執筆者一覧　須賀忠芳

第一部　政治制度と実効支配

武家政権と「唐船」——寺社造営料唐船から遣明船へ——

関　周一

はじめに——対外関係史研究の現在と課題——

日本中世の対外関係史研究は、倭寇などの日本人の海外雄飛を強調し、戦前のアジア侵略を支えたという反省から、戦後は極端に研究者が減少した。社会経済史の分野の研究が主流になる一方、日本中世は他の時代と異なり、アジアとの関係を最初から捨象して論じることが、研究者の間で常識になっていた。

上記のような研究状況は、一九八〇年代に入り、国家の相対化をめざした地域論が相次いで提起された中、「国家の枠を超える地域」の具体像を示した村井章介氏の研究[1]により、大きく転換する[2]。一九九〇年代に入ると、多様な研究テーマが次々に提示されるようになり、若手研究者が輩出して発表論文が急激に増加した[3]。

こうした動向を進める原動力となったのは、各地で長年続けられている研究会の存在がある[4]。さらに研究を後押しするものとして、二〇世紀末より、文部科学省の科学研究費による研究プロジェクトが相次いで組織された[5]。日本史と東洋史の協業はもとより、歴史学と考古学・民俗学・文学・美術史・地質学などの異なる学問分野との間の共同研究が活発になり、日本を含む海域アジアや内陸アジアの交流史の具体像が急速に明らかになり、短期間に膨大な情報が蓄積されてきた。近年は『史学雑誌』五月号の「回顧と展望」の「日本中世」におい

て、対外関係史で一節を設ける年が増えている。それを支えているのは、筆者よりも若い一九七〇年代生まれの世代であり、中堅・若手の対外関係史・海域アジア史研究者が集う「倭寇の会」に参加するメンバーが数多く含まれている。

右に述べたような研究環境の変化は、とりわけ中世前期の対外関係史研究を一段と飛躍させた。[6] 中国史料の断片的な記事や、僧侶に関する史料などを博捜した榎本涉氏の研究が、中世前期の対外関係史（海域アジア史）研究の到達点を示している。[7]

海域アジアのなかで中世日本の対外関係を理解しようとすれば、その本来的な姿は海商や僧侶が主体となる中世前期、または後期倭寇の活動する中世後期の一六世紀にあるものと考えられる。明朝の成立にともない展開する国家や地域権力の交渉は、海商や僧侶たちの活動を抑制し、人・物・情報の動きを統制するというもので、その典型である一五世紀は前後の時期に比べて異質といえる。[8] 今日残された研究課題の一つとして、中世前期から中世後期への変化をどのように描いていくのかという点があげられる。中世後期の日明関係については、長い間、戦前の小葉田淳氏の研究や、明代史研究の側からの佐久間重男氏の研究が基本となり、全般的に不振であったが、近年急速に研究が進展し、寧波プロジェクトがそれを後押ししている。[9] したがって右の課題に取り組むための研究が蓄積されつつあるといえる。

本稿では、鎌倉幕府と北朝・室町幕府が、中国（元・明）への貿易船や使船の派遣にどのように関与したのかという点を考察することで、中世前期から後期へ連続する側面と変化した側面とを明らかにしたい。検証するのは、①貿易船・使船を実質的に経営していたのは誰か、②貿易船や使船（異国の使船を含む）を警固する仕組み、③博多におかれた武家政権の出先機関（鎮西探題、鎮西管領・九州探題）の機能という三点である。

一　鎌倉末期の寺社造営料唐船とその警固

中世前期における活発な交流の到達点といえるのが、一四世紀前半の寺社造営料唐船である。その貿易の規模の大きさは新安沈没船が示しており、この船は元の慶元から博多をめざしていた東福寺造営料唐船と考えられる。

従来の研究では、寺社造営料唐船は鎌倉幕府や朝廷によって公許されたものと考えられ、[10] 貿易船は寺社または鎌倉幕府・朝廷により、そのつど仕立てられてきたとみなされた。そして「倭寇的事績が多くなってくる中での公許貿易船で、のちの勘合貿易への先駆的なものである」と評価された。[11]

こうした見解に対して、村井章介氏は、海商が日中間を往復させていた貿易船に、日本からの一往復に限って「造営料唐船」の看板を掲げさせて領海内の安全を保障し、そのみかえりに海商は利潤の一部を寺社の造営費用に拠出するというものだったという見解を示している。新安沈没船については、東福寺が最大かつ「公的」な荷主ではあったが、あくまで多数の荷主の一人にすぎず、この船は多数の荷主の荷を混載した「寄合船」とみている。[12] 高級品に偏さず、多様な階層の需要に応える商品を搭載していたのが、寺社造営料唐船の実像であったと考えることができる。[13] 寺社造営料唐船は、博多に拠点を持つ海商らが経営し、博多～慶元（現在の寧波）を主要な航路とし、船は中国で造られたジャンク船（新安沈没船の船材は、中国南部に生育する巨木）であったと想定できる。

このように想定すると、寺社造営料唐船と遣明船・遣朝鮮船との間には、かなりの乖離がある。竹内理三氏が指摘したように、遣明船や遣朝鮮船は、寺社の修造や大蔵経の獲得が派遣の目的の一つであり、寺院勧進船であるという点は寺社造営料唐船と同様である。[14] 足利義教期以降の遣明船は、このような寺院勧進船を含む船団で

い掛け軸が約一〇点あるという。

(16) 横田先次郎から贈られた瓶子についての記述は、『鹿瀬町歴史散歩』(鹿瀬町教育委員会編、一九九四年)、七五～七六頁を参照した。

(17) 東蒲原郡史編さん委員会編『東蒲原郡史資料目録』第一集(一九九五年)に実川村の肝煎宅の文書とともに所収されている。目録の刊行後、平成一四年四月に四点、同六月に五点の資料が追加されたため、現在の総数は九五三点となっている。

(18) 石垣悟氏のご教示による。

(19) 当地域では、和紙のことを生紙(きがみ)と呼び、近くの紙漉きをしている村から購入していた。生紙の巻物は障子紙に、折紙は帳面などに使用しており、膳椀を包む際には帳面をほどいた「生紙の悪いの」(反古紙)が用いられた。

〔謝辞〕本稿の作成にあたり、五十嵐家の皆様には温かいご協力とご支援を賜り、大変お世話になりました。また、新潟県立歴史博物館の職員の方々と、調査の前任者である石垣悟氏(現・文化庁伝統文化課)、藤原洋氏(現・郡上市教育委員会)、田村真実氏(現・杉並区立郷土博物館)には、研究成果について丁寧にご教示いただき、貴重なご助言を賜りました。ここに記して厚く御礼申し上げます。

あとがき

本論文集は、山本隆志先生の編集による論文集であると共に、先生の筑波大学ご退職を記念して、筑波大学教員及び卒業生・在学生により、先生への献呈論文集として編まれたものである。

「はしがき」で、ご自身が述べられているように、先生は、一九八八年四月に筑波大学歴史人類学系に赴任され、以来二十四年間にわたり、日本中世史を中心とする、歴史研究と歴史教育に情熱を傾けてこられた。先生の温かいお人柄もあって、指導を仰いだ学群生・大学院生は、多くの数にのぼる。

筑波大学は、研究室制度をとっていないこともあり、興味・関心によって広い分野のゼミを受講することができ、学生の興味に応じた研究が行えるシステムとなっている。しかし、その情熱に比して、私たちの史料読解などの実力は未熟であり、もどかしい思いをすることも多くあったが、そのような時にも、先生の温かいねばり強い指導は、私たちに自信を与え、よりよい方向に導いてくださった。

大学院を中心に、共同して荘園調査や高野山の院家の所蔵史料の調査を行ったり、ゼミの受講者の関心に応じて先生がテーマを選択して授業を展開してくださったお蔭で、私たちは、社会史・東国史等に関する理解を共に深めることができた。本論文集に、政治史や社会史、さらには民俗学にわたる広い範囲の論文が収められていることは、先生の幅広く、かつ懐の深い学識・視点に基づくご指導が結実しているように思われてならない。

また、筑波大学の卒業生は、全国各地で教員になっている者も数多い。在学中に先生の教育に対する情熱に接することができたことは、教員として児童や生徒、学生に接していく上での大きな財産となってい

る。さらに、先生の研究に対する真摯な姿は、大学院に進学し、また社会に出て研究を続けていこうとする時に、常に私たちを励ましてくれたように思う。

ご退職を前にした先生のお姿で本当に頭が下がることは、飽くことのない歴史に対する向学心である。「はしがき」でも述べられているが、日本史研究、とくに中世史研究の現況は、社会経済史的研究視角に基づく研究の停滞の中で、個別具体的な実証的・提案的な研究が進められているものの、その後者の多くが、全体史との関係に悩む状況にある。そうした中、先生は、今後も研究を続けられ、個別的研究を十分に全体史の中に位置づけ、全体史自体を見直す作業に挑まれるお気持ちであるように思う。先生の今後のご活躍を祈念すると共に、薫陶を受けた私たちが、その姿勢を受け継ぎ、それぞれの立場や関心の中で自らの研究を深めて行かなければならないように思う。本書が、その研究の一つの出発点となれば、幸いである。

本書の刊行にあたり、思文閣出版の原宏一氏には、大変お世話になった。刊行の計画段階から編集に至るまでいろいろとご面倒をおかけしたが、氏の支えがなければ本書の刊行は実現しなかったように思う。心から御礼申し上げたい。

二〇一二年三月二十日

佐々木倫朗
須賀忠芳

■執筆者一覧（収録順／2012年4月現在）

山本　隆志（やまもと・たかし）	奥付に別掲.
関　　周一（せき・しゅういち）	つくば国際大学・武蔵大学・中央大学・慶應義塾大学他非常勤講師.
山田　雄司（やまだ・ゆうじ）	三重大学人文学部教授.
浜口　誠至（はまぐち・せいじ）	東京大学史料編纂所学術支援専門職員等.
阿部　能久（あべ・よしひさ）	鎌倉市世界遺産登録推進担当学芸員.
井上　智勝（いのうえ・ともかつ）	埼玉大学教養学部准教授.
新井　敦史（あらい・あつし）	大田原市黒羽芭蕉の館学芸員.
山澤　　学（やまさわ・まなぶ）	筑波大学人文社会系准教授.
苅米　一志（かりこめ・ひとし）	就実大学人文科学部教授.
山野龍太郎（やまの・りゅうたろう）	専修大学附属高等学校非常勤講師.
佐々木倫朗（ささき・みちろう）	大正大学文学部歴史学科准教授.
須賀　忠芳（すが・ただよし）	東洋大学国際地域学部准教授.
平野　哲也（ひらの・てつや）	栃木県立文書館指導主事.
薗部　寿樹（そのべ・としき）	山形県立米沢女子短期大学教授.
小山　聡子（こやま・さとこ）	二松学舎大学文学部准教授.
佐藤喜久一郎（さとう・きくいちろう）	東京未来大学非常勤講師.
門口　実代（かどぐち・みよ）	三重県環境生活部　新博物館整備推進プロジェクトチーム・三重県立博物館学芸員.

◎編者略歴◎

山本隆志（やまもと・たかし）

1947年　群馬県生まれ
1971年　東京教育大学文学部卒業
　　博士（文学）
　　群馬県高校教諭の後，上越教育大学講師・筑波大学助教授を経て，筑波大学人文社会系教授
2012年　筑波大学人文社会系教授定年退職（3月31日）

〔主な著書〕

『荘園制の展開と地域社会』（刀水書房，1994年）『群馬県の歴史』（共著，山川出版，1997年）『新田義貞』（ミネルヴァ書房，2005年）『東国における武士勢力の成立と展開』（思文閣出版，2012年）共著『那須与一伝承の誕生』（ミネルヴァ書房，2012年）

日本中世政治文化論の射程（にほんちゅうせいせいじぶんかろんしゃてい）

2012（平成24）年3月31日発行
定価：本体7,800円（税別）

編　者　山本隆志
発行者　田中　大
発行所　株式会社　思文閣出版
〒605-0089 京都市東山区元町355
電話 075-751-1781（代表）

印　刷
製　本　亜細亜印刷株式会社

© Printed in Japan　ISBN978-4-7842-1620-8　C3021